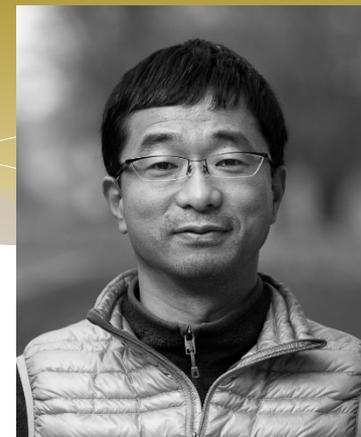


2つの異なる新奇性による ドーパミン依存的記憶の亢進

竹内 倫徳先生

Associate Professor, Department of Biomedicine,
Aarhus University (Denmark)



2018年7月31日（火）16:00～17:30

神戸大学医学研究科研究棟B 2階共同会議室

海馬に形成された、ささいな日常の記憶の多くは1日で忘れられますが、直前や直後に新奇な体験をとまなうと忘れにくくなることが知られています。最近の私達の研究により、新奇な環境体験により活性化する青斑核から海馬へのドーパミンの供給が、通常忘れ去られる日常の記憶を長期記憶へと変換させるゲートとして働いている可能性をあきらかにしました (Takeuchi et al. *Nature* 2016)。また、腹側被蓋野から海馬へのドーパミンの供給は、報酬に関連した新奇性により活性化し、記憶の保持を修飾している可能性が示唆されました (Yamasaki and Takeuchi *Neural Plasticity* 2017)。

参考文献

1. Yamasaki M†, Takeuchi T† (2017) Locus coeruleus and dopamine-dependent memory consolidation. *Neural Plasticity* 2017:8602690. †co-last author.
2. Takeuchi T*, Duzskiewicz AJ*, Sonneborn A*, Spooner PA, Yamasaki M, Watanabe M, Smith CC, Fernández G, Deisseroth K, Greene RW, Morris RGM (2016) Locus coeruleus and dopaminergic consolidation of everyday memory. *Nature* 537: 357–362. *co-first author.
3. Takeuchi T, Duzskiewicz AJ, Morris RGM (2014) The synaptic plasticity and memory hypothesis: encoding, storage and persistence. *Phil Trans R Soc B* 369: 20130288.

担当：神戸大学医学研究科薬理学分野 教授 古屋敷智之（内線5440）

主催：シグナル伝達医学研究展開センター

連絡先：研究支援課研究企画係（内線5195）

E-mail: k9shien@med.kobe-u.ac.jp